

平成 29 年 11 月 16 日

北海道サッカー協会 審判委員会 各位

北海道レフェリーアカデミー第 10 回 議事録

報告者：宗像 瞭（十勝）

<日 時> 平成 29 年 11 月 11 日（土）、11 月 12 日（日）

<場 所> 白樺学園高等学校、十勝地区サッカー協会事務所、森の里コミュニティセンター

<参加者>

北海道レフェリーアカデミーマスター : 山崎 裕彦 氏

インストラクター : 伊藤 真也 氏

古曾部 統太郎 氏

審判員 : 堀 悠雅、宗像 瞭、

板矢 智志、須摩 和樹

オブザーバー : 帯広工業高等学校サッカー部員 6 名

11 月 11 日（土）

9 : 30 集合、開講式

9 : 45 ビデオクリップディスカッション 山崎 RAM

「Others ～プレゼンスとマネジメント～」

トップレフェリーが試合の中で行っているマネジメントや表現の方法について鑑賞し、マネジメントのタイミングや、表情、寄り方、距離感など、効果的なマネジメントの方法を確認した。しかし、現状私たち審判員には、このようなテクニカル（技術）のようなものよりも、競技規則の理解や手順、更には、リーダーシップや審判員としての気品。と、「人として」の部分が強く求められる。



12 : 00 試合①第 6 回東北海道ユースサッカー新人大会

帯広大谷高校 VS 網走南ヶ丘高校 (R : 宗像 A1 : 板矢 A2 : 鈴木 4th : 山根)

13 : 40 試合②第 6 回東北海道ユースサッカー新人大会

根室高校 VS 釧路湖陵高校 (R : 須摩 A1 : 堀 A2 : 山根 4th : 玉田)



15 : 10 移動

16 : 15 競技規則テスト

17 : 15 審判員プレゼン 「試合分析」

堀 → 「平成 29 年度 第 96 回全国高校サッカー選手権大会北海道大会 2 回戦 駒大苫小牧高校一北海高校」

まずは、ほかの審判員からの情報や、試合の重要性を判断材料にどのような試合になるかの予測を建て、それを基にゲームプランを作成した。今回であれば、ロングボールを多用するチームであることと、トーナメ





ント戦であり、かつ、敗ければ引退という試合の性質を踏まえ、アフターファウルに意識を持っておくこととした。

実際に試合で課題となった点は、「動き出し」と「マネジメント」と自己分析する。

「動き出し」は、中盤でのポジショニングで、自分の方に正面からドリブルで向かってくるプレーに対して、迷ってしまっていた原因であり、そもそもの動き出しを早くしていれば、解決できたものである。また、動き出しが遅れてしまった際でも、スプリントを使う修正を怠らなければならぬ。

「マネジメント」については、ファーストファウルで激しいプレーがあり、会場全体に危険な行為であったことを注意しようと思ひ、注意をしたが、上手く場を作れず、全体に伝わらせることができなかつた。競技者を正対させる術や、引き出し方により、改善していく。

18 : 15 夕食

19 : 15 審判員プレゼン 「試合分析」

板矢→「平成 29 年度 第 96 回全国高校サッカー選手権大会北海道大会 2 回戦 北海道大谷室蘭高校—釧路北陽高校」

堀と同様に、まずはチームスタイルの情報収集をほかの審判員から行ひ、ある程度の試合の予測をつけ、ゲームプランを構築した。

試合の中で、PK を示した場面で、ベンチから声が上がってしまった。主審は、近い位置で見ている、自信を持って判定をしたが、なかなか役員の納得を引き出すことができずにいた。今まで、「判定に説得力を持たせるにはどうすれば良いか」の問への答えは「争点に近いポジショニング」と指導されることがあつたが、必ずしもそうではなく、近さ≠説得力なのだと感じた。振る舞いや立ち姿、PK を示した後の動きなど「プレゼンス」で改善できるポイントとなる。

ポジショニングについて、FW に入るくさびのパスの邪魔になってしまうことが、試合を通して多かつた。バイタルエリアは、攻撃の肝となる部分で、邪魔になってはならない。逃げる地点の一つとして、守備側のボランチの背中に隠れることも一つとなる。

20 : 00 各試合分析

(帯大谷高校—網走南ヶ丘高校)

R 自己分析→課題として、中盤で巻き込まれないポジショニングを意識して試合に臨んだ。結果として巻き込まれてしまう場面はあつたが、巻き込まれる前に抜け出せるような感覚を得ることができた。俯瞰でフィールドを見るような考え方を持つことで、自分の位置やボール、競技者の位置を理解することができ、有効であつたと思う。今後は、俯瞰で見る考え方を保ちながら、それに応じてどのポジションに入るかを瞬時に判断できるよう努めていく。

INS 分析 →動きの中のコース取りにクセがあり、AR サイドから事象を見たがる人が多い。時には、そのような動き方も必要だが、基本は、対角線式審判法に基づいた動きをする方が無難と思う。そのために、コース取りはさることながら、早めの動き出しで、レフェリーサイドに動き出し、余裕をもって見ることをしてみると良い。中盤で巻き込まれてしまったときは、視野を切らないようにス



テップを使い分け、逃げ道を2個以上は想定しておく、慌ただしくならず次の展開に修正することができる。

(根室高校-釧路湖陵高校)

R 自己分析→70分間通してボールを常に争点に入れていくポジショニングを意識して行い、良い角度で監視することを意識しました。



その中でボールの展開に合わせてしまい競技者と被ってしまいパスコースに入ってしまった2回パスにぶつかってしまいました。判定では、手を使った反則を続けさせることがないようになっていくことができたと思います。アシスタントとも協力をすることができファウルサポートも自分が欲しかったタイミングでもらうことができたと思います。

INS 分析 →争点を監視する際に止まって争点を監視しているところがありそのことで展開に遅れてしまいますところや、競技者のプレーエリアに入ってしまう邪魔になってしまっていた。プレーが切れた際に勝っているチームがゴールキック、フリーキックのプレーの再開に時間をかけさせてしまっていたのでどのようにしてプレーの再開を早く行わせて遅延をさせないことができるのかスムーズに試合を展開していくことができるようにマネジメントすることができるのかが重要。

21:00 1日目 終了



11月12日(日)

8:15 集合

9:30 試合③第6回東北北海道ユースサッカー新人大会

帯広大谷高校 VS 根室高校 (R:板矢 A1:宗像 A2:玉田 4th:常屋)

9:30 試合④第6回東北北海道ユースサッカー新人大会

釧路北陽高校 VS 北見北斗高校 (R:堀 A1:須摩 A2:佐々木 4th:山根)

11:20 移動・昼食

12:40 審判員プレゼン 「競技規則の解説」

須摩→第12条中「直接フリーキック」

直接フリーキックとなる反則は、7項目と4項目に分かれており、7項目の「不用意、無謀、過剰な力」について、選手の安全を第一に考え、プレーヤーズファーストを意識し、判断をすることが重要。4項目のうち、ハンドリングやホールディングの反則は、試合の中で重要な場面で起こりえることで、重大な判定につながることもある。その際、ハンドリングについては、考慮事項を頭に入れ、判断をする必要がある。



直接フリーキックの手順として、シグナルをるところから、再開の笛を吹くまでを6つのセクションに分けることで、明確にした。中でも、クイックリスタートの保障とセレモニーに入るまでの切り替えは難しいことが多く、選手とのコミュニケーションや、選手の意図を汲み取ることで円滑に進めていくことができる。そして、再開時のポジションとして、「壁の飛び出し、壁のハンドリング、次の争点、AR」のすべてが視野に入っているポジションが推奨される。

宗像→第 11 条「オフサイド」



導入として、オフサイドのルールの意義として、「スポーツとしての魅力を引き出すため」とし、戦術を構築し、サッカーというものをより白熱したものにするためのルールと考えたことを表現した。

競技規則の中身の解説は、まず文章中でのオフサイドラインの定義を確認し、

- ・守備側競技者が GK を除く全員がハーフウェーラインより相手陣地にいる場合、ハーフウェーライン上のどこが厳密なオフサイドラインになるか
- ・守備側競技者の腕はオフサイドラインになり得るか（ゴールキーパーが後方から 2 番目の競技者である場合は如何か）

の 2 点を、競技規則の文章を根拠に整理を行い、次にオフサイドポジションにいた攻撃側競技者が

- ・ボールをプレーした後に守備側競技者に第 12 条の反則を犯される
- ・ボールを追っている最中守備側競技者に第 12 条の反則を犯される
- ・ボールを追っている最中に守備側競技者に第 12 条の反則を犯した場合の再開方法。再開場所について同様に競技規則の文章を根拠に、確認をした。

14 : 20 各試合分析

(帯広大谷高校-根室高校)

R 自己分析→正しい判定をするために試合の中でステップなど、細かく修正することを意識した。しかし、他の選手のブラインドになって正しく判定することができていない場面があった。主に争点に関わっていない選手の動きや位置を把握することによって改善したい。動きに関しては中盤にいてしまうこともあり、邪魔をしかねない場面があった。動きの中の悪い癖を解消するために、練習試合等で意識的に改善したい。

INS 分析 →動き出しは良かった。争点に離されない距離を保ちつつ、余力をもって判定していた。しかし、串刺しになっているときもあり、正しい判定になっていなかった場面があった。主に競合いの場面において、競技者がボールにチャレンジできる可能性があるのかないのかについての判断が若干乏しい。「ボール」に対してか、「相手競技者」に対してかを見極めたい。



(釧路北陽高校-北見北斗高校)

R 自己分析→DF から FW へ渡るパスは逃さず動き出せることを意識し、概ね達成することができた。それ以外の展開は予測が難しい試合であったので出たところに行くという意識で取り組み、これも達成できたことから争点の近くで判定することができたと思う。がむしゃらさとはどのように表現して行くかということが整理できていなかったため、今後改善していきたい。(改善策は INS 分析に記入)

INS 分析→フリーキックで再開するとき壁のハンドの監視をできているかが疑問である。本当に見えているの



であれば良いが、もう少し見やすいポジションに修正し、ボールが蹴られてからハンドの監視がないと判断したときに動き出しても次の争点を監視できるのではないか。シグナルのキレや判定後の争点に寄る動きがないことから走っていてもがむしやらは感じられないのではないか。判定後数メートル素早く近づくことで改善されると思うので今後取り組んでみると良い。

15 : 00 試合分析共有 古曾部 INS

今回の試合の中で起こったことの共有を行った。

① 主審と副審の協力

副審の近くタッチライン際で守備側競技者がボールをクリアした後に、攻撃側競技者がアフタータックルを行った。主審は、反則を取らず、副審からの援助もなかった。この場面から少し試合が荒れ始めることとなってしまった

主審と副審の協力において、主審がクリアに事象が見えていると、副審が思っても、勇気をもって援助することは重要である。見えている角度が違うため、主審から見えていると勝手に思っているも見えていないこともある。

② ハンドリングの考慮事項

くさびのパスが入り、攻撃側のFWがボールを受けようとした際、1.5mほど手前で、守備側競技者がボールをカットしようとチャレンジ、触ることができた。しかし、ボールは勢いを保ったまま後方に逸れ、当初受ける予定だったFWの腕に当たった。主審は、これについて、ハンドリングの反則を取った。

ハンドリングの考慮事項のなかに、「相手競技者とボールの距離（予期していないボール）」とあり、今回の事象だと、守備側競技者がカットしようとしてボールを逸らしたことにより、予期していないボールに変わり、腕に当たったようにも見える。腕が動いたというよりは、ボールが腕に当たったような印象である。ただし、不用意な位置に腕があったことや、反応できる距離感だと主審が判断した場合は、ハンドリングの反則になるため、間違っている判定ということではない。

15 : 30 振り返り・1年間の総括

16 : 15 全日程終了、解散

